

## わたしは新聞のファンです

船尾 日出志

(日本NIE学会 第10回愛知大会 実行委員長)

当大会は事務局長の土屋武志教授を中心に準備され、ここに初めてたく開催されることとなりました。本来、この場では実行委員長としての格調高い「巻頭言」を書くべきではあると存じますが、浅学非才の身であります。新聞への日頃の思いを披歴することで、その任を果たしたことにさせていただければ、何よりでございます。

わたしが朝起きて、一番にすることは新聞に目を通すことです。自分の記憶では、中学生の頃にすでにそのような習慣をもっていたと思います。というところは五十年以上続いている習慣です。以前はかなりの人々が、少なくとも日本では、そのような習慣をもっていたはずですが、しかし、現在ではスマホやパソコンでのメールチェックから一日を始める人が多いのかもしれない。

ではなぜわたしは新聞を読むのか？その理由を、思いつく順に列挙します。

第一に新聞を読まなければ見知らぬ人のままであるはずの人が、ある日突然とても気になる人になるのです。たとえば二〇一一年四月十二日の「朝日新聞」に掲載された瓦礫の前でトランプペットをもつて涙を流す高校生のSさんの写真をみたとき、東日本大震災の被害者や遺族の悲しみに、多少は具体的に迫ることができました。同新聞は、人のためにな

る仕事をしたいという気持ちで医科大の学生となったSさんのその後の様子を、定期的に伝えていきます(左の写真は二〇一三年三月十二日付「朝日新聞」より)。その記事を読むとき、わたし自身はまるでSさんを見守るおじさんのような意識になつているのかもしれない。

第二に、新聞記事は追究の出発点になります。たとえば、わたしは二〇一一年四月七日の「朝日新聞」の記事から、一八世紀半ばにポルトガルの首都リスボンを襲った大地震と津波について知ることができました。と同時に、その大災害について追究しました。するとリスボンを襲った大災害はその人口の三分の一を奪い、すでに地位低下傾向にあったポルトガルの没落をはやめたこと、またフランスの思想家ヴォルテールに『カンディード』を書かせ、ドイツの哲学者カントを地震研究に向かわせ、啓蒙主義の進展を促したことを知りました。

第三に、新聞記事はそのまま優れた教材になるのです。とりわけ、社会科学系の教科を専門としている者にとってはまさに有り難い教材なのです。たとえば二〇一三年九月二十七日の「朝日新聞」に掲載された左の記事は、生徒たちが有意義な議論を展開することができるシレンマ問題を提起しています。すなわち認知症の高齢者が、介護担当の家族の過労に由来す

る一瞬の油断もあって、徘徊し、線路内に入り、列車にはねられて亡くなられた事故を受けて、JR東海はその家族に賠償を求めて訴訟を起しました。その結果、裁判所は家族に賠償を命令したのです。

第四に、新聞記者の書く分かりやすい文章は、人々にとってのお手本だと思います。新聞記事は、途中で読むのを止めても、エッセンスを見逃すことがない不思議な文章で構成されています。実は、わたしは新聞記事のような講話ができる教員になりたいと常々思っているのです。

その質と量からして考えられないほど安価な読み物が、契約さえしてあれば、早朝から届く。わたしは、そんな新聞の大ファンです。

